

## ヨーロッパ文明における否定および批判の契機について

——デリダ、ドゥールーズにおいて二〇世紀のヨーロッパ文明を理解する  
ための基礎作業として——

### (1)

二十世紀のヨーロッパ文明は、さまざまな弊害を生み出してきたことよって、批判の対象とされることがますます多くなってきたように思われる。確かに、その科学技術ひとつをとりあげても、自然の一部のみならず、地球全体をすら破壊しかねないほどの弊害を生んでいることが事実である。しかし、そのヨーロッパ文明を批判するという場合、そこには大きなジレンマの潜んでいることが気付かれざるをえないであろう。すなわち、そこではいったい誰が誰を批判するということであろうか。あるいははいったい誰が何を批判するということであろうか。

ヨーロッパ思想がヨーロッパ思想自体を批判するのだろうか。もしそうだとすると、その批判とは、ヨーロッパ文明をその基礎原理そのものから丸ごと否定するという、文明の破壊なのだろうか。しかし、ある文明が、文明自体を、自らなきものにすると

### 保坂 幸博

うようなことが、果たしてありうるものだろうか。それとも、その否定は、ただたんに、その悪くなった部分を一部のみ否定するというような、一種の改定、修復なのであるか。しかし、修復する手段が、その文明の根本原理によらなければならないような根の深い問題である場合に、それは事態をただ悪化させるにすぎないのではないだろうか。それは例えれば、病気を治そうとして用いる手段が、その病気を発生させた原因と同じ由来のものであるのに、そのことが気付かれられないようなものなのではなからうか。

それともヨーロッパ文明を批判するのはヨーロッパの外にいる存在（例えば我々日本人）であるべきなのだろうか。それならば一見したところ、批判と否定が徹底されるようにも思われる。しかし、そのように思われるのは、実のところ、ほんの見掛けだけにすぎないことが、すぐに指摘されよう。すなわち、今日我々の文明は、むしろヨーロッパの原理を直に用いることによって発展

を遂げつつある。むしろ我々こそがヨーロッパ文明の、いわば純粹培養的な形態である。すなわち、ヨーロッパ文明の否定ということが問題であるかぎり、我々は、第三者としてその任につくことが可能であるところか、むしろその批判の矢面に立たざるを得ないということにもなる。

また、今問題とするデリダおよびドゥールーズに関して、結論を先取りして述べるならば、現代フランスのこの二人の思想家の中には、ヨーロッパ文明の否定はおろか、それに対する批判すらも見受けられない。これはいったいどのように理解すべきなのであるか。我々にはかくも急務のように思われる文明批判が、彼らには無縁のことだというのだろうか。それとも、その重要さは認めるにしても、それを行うことのできないならかの事情があるのだろうか。

しかし、それを問う前におそらく、批判および否定という概念自体に問題が隠されているのである。

## (2)

ヨーロッパ文明を批判するとか否定するとかの課題を立てる場合、誰が誰を批判するのか、その否定は全体的か部分的かという右の難題に加えて、事態をいっそう複雑にせざるを得ない事情がヨーロッパ文明自体の中に存在する。そしてそのことが、実のところ最大の困難であるということが、気付かれてくる。それでは、その困難とはいったい何だろうか。

ヨーロッパ文明にとって、否定と批判は、その思想の成り立ちそのものを可能にする、根源的な契機のひとつにはかならなかったということ。それが最も困難な点なのである。

ある思想が他の思想を否定するということが、一つの思想として確立されるために、必要不可欠の作業であった。ある一つの思想自体の内部においてさえ、いくつかの差異を作り上げ、一方が他方を否定するという作業が行われた。そしてそのことは、ひとり哲学思想に限らず、宗教的な思想にも、文学や芸術においても見られるものであり、またこのようにして、現実の社会制度にも、社会的な運動の中にも指摘し得るであろう。歴史を諸思想の相克と交替の連続と考えるならば、否定と批判は、ヨーロッパの歴史そのものを構成する契機であったということもできる。

さらにいえば、批判や否定は、思想を構成する、隠れた無意識の契機にとどまっていたばかりではない。あるときには、その批判と否定自体が反省的に前面に引き出されて、一つの思想体系をなす場合もあったのである。

そこで、否定と批判のこのような在り方を、具体的な例の中に検証する必要があると感ぜられてくるであろう。ここではそれを、近世以降の哲学諸思想のごく一部をとりあげ、しかも、例示という議論の必要上、通例の哲学史的な理解によって了解され得る内容に限って、少々垣間見ることにしたい。

(3)

◆ デカルト…懐疑という名の否定。中世スコラ学との関係で見  
る限りは、懐疑は否定である。

◆ ロック、ヒューム…いわゆるイギリス経験論は、デカルトの  
生得観念を否定し、それを出発点とすることによって、はじめて  
可能であった。

カント…合理論と経験論の総合という形の否定。『批判』の  
意識的抽出。他の思想の批判でも他の書物の批判でもない、理性  
の能力自体の批判であるという形で、否定によらない批判の意味  
合いを確立したかに見えた。

◆ フィヒテ…カント哲学の不足を指摘することによって出発。  
フィヒテが哲学を始めたこと自体、カント哲学を知ったことによ  
っていたこと、彼の書物もカントの力で世に出たこと等を考えれ  
ば、この否定は極めて深刻な様相を帯びる。

一般にこの時代の思想家たちは、個人的にもお互いを知ってい  
る場合も多く、批判の語調も厳しいものがある。戦闘的な思想の  
在り方が強調された時代だったと言えよう。

(4)

ヘーゲル…思想が思想を批判して止まない状況が、ヘーゲルに  
は一種の混乱と見えたであろう。それゆえヘーゲルの体系はそれ  
ら諸思想の対立全体を、内部に包含するものとなった。それは世

界と歴史の一大パノラマを提供した。そして、否定は体系的弁証  
法を成立させるひとつの契機となったのである。従ってその否定  
は、もはや言葉の単純な意味における否定ではなく、やがては大  
きな肯定を準備するものとして、肯定の中に包みこまれるものとな  
った。(論理学、精神現象学)。

「ここまでの結論…否定はヨーロッパ思想を動かせる力それ自体  
である。それゆえ、もしこの事情を承知しないでヨーロッパ文明  
の批判を試みるなら、二十世紀末の今日においてさえ、批判の意  
図は達成されることができない。むしろ批判や否定は、燃え盛る  
火に油を注ぐのたとえにも似た状況を作るであろう。そして、も  
し、ヨーロッパ文明が今日弊害をもたらしており、部分的にせよ  
否定されなければならないものがあるという主張が正しいとして  
も、ヨーロッパ文明の内部において『批判』と『否定』を用いる  
ことは、むしろその弊害を助長する。」

(5)

ニーチェ…ヘーゲルの否定は、「ヨーロッパ文明の否定」とい  
う今の問題と対比してみれば、なんら否定とよぶことはできない  
ことが明白である。その否定は、このような問題と対比すること  
が許されるなら、否定ではなく、むしろ(ヨーロッパ文明の)肯  
定であろう。

たとえ話で述べるならば、ヘーゲルは、ヨーロッパ文明をすっ  
かり内包し得るような一つの巨大な船を建造したのである。なる

ほどその船の内部には否定も抗争もあるかもしれないが、その船自体が覆されることはない。弁証法は、否定と否定の繰り返しによって、未だ真理にまで至っていない存在を廃棄してゆくが、その弁証法自体は、決して廃棄されることがない。

このように考えるときに初めて、ニーチェの『否定』が理解されてくるように思われる。「神は死んだ」という言葉によってヨーロッパ二千年の諸価値を「否定」するとニーチェが宣言したとき、それは、ヘーゲルの建造したヨーロッパという船そのものの転覆が意図されていたと理解すべきである。それは、あの価値やこの価値の批判ではなく、そもそも価値を作るという作業そのものの批判であった。

ニーチェはヨーロッパを否定して、いったいどこへ出て行こうとしていたのか。それは定かではない。おそらく、そのことはニーチェ自身にも見通し得ないことだったかもしれない。しかし、ヨーロッパの歴史の中で、ヨーロッパ自身が否定され得るものだという可能性を見せたのは、ニーチェが初めてであった。そしてそれが、ヨーロッパの世紀末の諸思想の台頭を促したものであったこともまた、疑い得ないところである。

(6)

二十世紀末のフランスの哲学者、ジャック・デリダと、ジル・ドゥールズがおかれている歴史的状況は、このような、ヨーロッパ文明の病である。

既に十九世紀においてニーチェが「神は死んだ」と宣言したとき、その言葉は、ヨーロッパ文明が嘗々と築いてきた諸価値が根底から崩れつつあるのではないかと、人々に疑いをもたせるに充分なだけの力をもっていた。ヨーロッパ文明は、もはや空中にさんさんと輝く陽の光ではなく、沈み行く夕方の光なのではないかと、次第に声高に語られるようになった。つまり、ヨーロッパ文明に対する全的な否定と、その現実的な衰退が始まったように思われるのである。

当然のことながら、哲学固有の領域においては、この混乱は特に隠しようのないものがある。それどころか一部では公然と、今後はもはや哲学そのものが成立しなと言われている。そしてまた事実、おそらくは、それに対するハイデガーとフサルの大掛かりな抵抗運動を最後として、哲学の名に値すると、衆目の一致して認めるものは登場していない。確かに哲学は息絶えたようにも見えるのである。

デリダおよびドゥールズの試みは、結論を先取りして言えば、過去の偉大な諸哲学はならんら死滅したのではないということ、それゆえ、ヨーロッパ文明はならんら衰退の道にはないということを示すことにあると思われる。

(7)

ジャック・デリダの試みは、ヨーロッパ文明が衰退していることを否定するだけではない。むしろその試みは、ヨーロッパにとつ

ては、ヨーロッパ以外のものは存在することができないことを示すことにある。そしてさらには、ヨーロッパ文明はヨーロッパの外に向かつては、ますます力を延ばして行くであろうと、考えているように思われる。論文『力と意味』の中で、「西欧世界そのものは版図を縮小していくが、その分に応じて、西欧思考のほうは自らを拡大していく。それが西欧的思考の逃れがたい宿命なのだ」という意味のことを書いている。

デリダに関する詳細はすでに機関誌『文明』の第五八号に掲載したので詳細は省略したい。そしてここではその要点のみを簡条書に記すこととしたい。

(a) デリダは、否定と批判の契機を用いていない。もしそれを用いたとすれば、それは単に、十七、十八世紀的な思想状況を再現するにすぎないことになるという判断があるように、推測される。

(b) デリダの意図は、過去のヨーロッパ諸思想の差異を明るみに出すことではない。むしろ彼が強調したいことは、ヨーロッパ文明の一性、その根源の一性であり、ヨーロッパ文明が一つの壮大な統一だということである。

(c) そこでデリダの哲学はある特異な方法を用いることになる。その方法を、彼の著作『エクリチュールと差異』の中の『暴力と形而上学』の中に見ることができている。

要点

◆レヴィナスがヘーゲル哲学を（さらにはハイデガーやフッサールも）「暴力」であると批判した。

◆デリダは、第一段階ではそのレヴィナスを「可能な限り反ヘーゲル的である」と認める。

◆しかし、第二段階では、デリダ自身がヘーゲルの哲学をつきつめてみると、それはレヴィナスの主張する「形而上学」あるいは「メシア的終末論」と同じものであると、結論される。（すなわちデリダは、レヴィナスを反ヘーゲル的であると認めながら、議論をつきつめてみることによって、「レヴィナスは、彼自身が考えている以上にヘーゲルに近いのであり、外見上極めて過激なやり方でヘーゲルに対立しているように見えるときほど、ますますヘーゲルに近いのである」と結論する。レヴィナスが激しい調子でヘーゲルを攻撃しているのは事実である。それは一個の巨大な暴力であると言う。しかし、デリダは、そう主張するレヴィナスとヘーゲルの両者をつぶさに検討してみる。するとその結果、いくつかの表現上の違いや偏差を修正することによって、この両者が、根本的には同じ一つの核心により、ヨーロッパ文明という同じ一つの全体の内にあることが明白になる。このようにデリダは論ずるのである。）

この手法は、他にも『コギトと《狂気の歴史》』や『発生と構造』と現象学』の論文において、くりかえし用いられている。

(d) デリダのこの方法論は、ヨーロッパ文明の同一根源性を言うのには都合が良い。何故なら、それは、自分の主張をたてないため、自らは差異を作らず、むしろあらゆる差異を消去する働きを

するからである。

(e) しかし、その方法は、何か新たなものを作るといふ目標を最初から放棄していると、言わなければならない。

〔デリダに関する結論〕デリダ哲学の方法論は、ヨーロッパ思想の同一根源性を示すのに役立つが、新たなものを生み出す力に欠ける。従って、この方法は、ヨーロッパ思想を保持しつつ、同時にその終焉を告げる。それは、(5)のニーチェのように、ヨーロッパ文明に対して『否定』を用いず、逆に、大いなる肯定を言うが、ヨーロッパ文明の息を止めるといふ点で、同じ結果をもたらすものではないかと思われる。

(8)

(a) ジル・ドゥルーズも、デリダとはまた異なる方法を用いて、ヨーロッパ諸思想の統一性を示そうとしているように思われる。

そのことをよく示している論文の一つが、『ニーチェと哲学』である。この論文の目的が、一般にヨーロッパ文明を丸ごと否定し破壊したと思われるニーチェの哲学を、解釈し直すことである。すなわちドゥルーズはニーチェの遺稿『権力への意志』を解釈して、それはヨーロッパ文明の諸価値を破壊してはいるが、しかし、その破壊の彼方には、さらにもう一つの新たな体系が意図されていたと述べているのである。そして、もしドゥルーズのその解釈が正しいとすれば、確かに、その体系は、たとえそれまでには見られたことのなかった新奇な形においてはあ

も、再びヨーロッパという一つの総合の中に、組み込まれるものとなるであろう。

果たしてドゥルーズが、ニーチェの中からその体系を抽出することに、真実成功しているかどうかは、疑わしい。

しかし、ドゥルーズは、ニーチェ自身がまとまりを付けることができずに、単なるアフォリズムの羅列として死後に残した思考の切れ端を、まるで一貫した流れをもつ一書物でもあるかのような外観を与えて、提出することができた。そしてそれだけでも、ドゥルーズのひそかな意図は達成されているのだといえるのかもしれない。

(b) この関連から、ドゥルーズが、ニーチェの『否定』をどのように解釈しているのかという点が、他のことにもまして重要なものであると言える。このことに関するドゥルーズの考え方の要点は次の通り。

◆これまでニーチェはヘーゲルをよく知らなかったと言われ続けてきた。しかし、ヘーゲルの運動、さまざまなヘーゲルの潮流はニーチェには周知のものであった。(つまりドゥルーズは、ニーチェの混乱した思考過程をヘーゲルの弁証法に近付けて解釈しようとしている。)

◆ニーチェにおいては、ある力と他の力との本質的な関係が、本質における否定的要素として把握されることは、全くない。

◆自分への服従を強いる力は、他の力との関係において、他者すなわち自分自身ではないものを、否定するのではなく、そこに

ある固有の差異を肯定し、その差異を享樂する。

(C) またドゥルーズは、上に述べたのと同じ意図から、ヨーロッパの非合理的な思想や文学を解釈し直している。

「非合理的」とは、「ヨーロッパ的論理によってはとらえられないもの」あるいは「ヨーロッパ論理の外にはみ出るもの」という意味を含むであろう。

従って、もし、それら思想や文学が、それにもかかわらずヨーロッパ的論理の枠内でしか理解され得ないものであるということが示されれば、あるいは、少なくとも、ヨーロッパ的論理との関係においてのみ何物かでありうるということが示されれば、ドゥルーズの上記の意図は達成される。(『カフカ＝マイナー文学のために』)

もつともこの手法は、デリダも、非合理を言うフロイトに対して、また、バタイユの文学やアルトーの演劇に対して、用いている。